

## 米国企業界を制するインド人経営者たち

荒野 詰也

一九八七年エクストランというメーカーが米ナスダック市場へ上場した。一九六五年にインドから米国に渡ったカンワル・レキ氏という第一世代の「印僑」だった。それから三十年あまり様相は一変してきている。米国の経営者トップにインド出身者が輩出している。事例は、マイクロソフトのサティア・ナデラ氏、グーグルのスタンダル・ピチャイ氏、アドビシステムズのシャンタヌ・ナラヤン氏、IBMのアルビンド・クリシュナ氏、ツイッターのパラグ・アグラワル氏、シャネルのリナ・ナイヤル氏等である。

国連によると、米国で暮らすインド出身者の数は、二〇一九年時点で二六六万人に達したといわれ、四五万人程度だった一九九〇年から六倍近くに増えた。シリコンバレーの調査団体がまとめた最新統計によると同地域で三八%を占める「外国生まれ」の住民のうち十四%がインド出身だ。レキ氏らの時代から脈々と続く人材の裾野の広がり、インド人経営層TOPCEを輩出しやすい土壌を作った。ただ人数だけがインド人優位の原因ではない。七〇〇八十年代からの印僑は、「テッキー(技術者)」という印象が強く成功者にはインド工科大学(IIT)の出身者が圧倒的に多い。

従来の経営者層は、マーケティングにたけた人が多かったが、近年の経営者は、「技術に基づき経営戦略を重視する」傾向が強い。

いずれにしても、これらの現象を呈するベースには、この世界を席卷する広い人的ネットワークがあることが不可欠だが、その他の要因を推定してみると次のようなものである。

- 一 英語やITスキルなど世界に通じる能力を持つ人材の層が厚い
  - 二 として高いITスキルを持つ多くのインド人が米国などに留学し、頭角を現す
  - 三 本来の多様性を前提とした考え方や経営手法が多国籍企業にうまくマッチした
  - 三 受験競争・出世競争の厳しい環境で培われた我慢強さや創造性・変化対応能力
- とにかく、圧倒的なこのパワーに飲み込まれるだけでなく、日本企業も意識を変えてこれらから学ぶべき時が到来している。